

てつとりとうろう ほうじさんねんめい
鉄釣灯笼 宝治三年銘

＜概要＞

員数	1基
法量	総高 31cm
時代	鎌倉時代（1249年）

鉄製、鍛造によった六角形釣灯笼である。本品は、高度な鉄の鍛造技術によって総体を形作り、火袋¹の羽目板²に文様と銘文を透彫^{すかしぼ}りしている。水平をなす笠^{かんだい}や鑲台^{かんたい}の形と菊座^{きくざ}刻み⁴、そして何よりも笠に比べた火袋の量感の豊かさなど、いずれも鎌倉時代の造形の特徴とみて差しつかえなく、銘のとおり宝治3（1249）年に製作、調進されたものと判断される。

本品を伝える密蔵院は、嘉暦^{かりやく}3（1328）年、慈妙^{じみょう}⁵の創建になる天台宗寺院である。本作は密蔵院の創建以前のものであるが、本尊薬師如来立像（重要文化財）が平安時代後期の作であることから、密蔵院の前身あるいは周辺地域に何らかの薬師如来を祀^{まつ}る仏堂が存在し、そこに用いられた釣灯笼だったことも想定できよう。

いずれにせよ本作は、紀年銘をもち鎌倉時代半ばまで遡^{さかのぼ}る鉄釣灯笼として、愛知県のみならず全国でも最古級の作例であり、県有形文化財として指定するにふさわしいものである。

1 灯笼等の火をともしどころ。

2 壁の同一平面に張った板。

3 金属製の取っ手を取り付ける台。

4 菊の花の形にした座金。

5 1291-1368 鎌倉-南北朝時代の天台宗の僧。尾張に密蔵院をひらく。



鉄釣灯笼 宝治三年銘（愛知県提供）